

エンカウンター (ENCOUNTER)

第218号

2020年6月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (3)

分かることと分からないこと

小西先生は説教の中で、「これは今、私にはわからない。天国に行ったら、パウロ先生に聴いてみる」と言われたことがあった。ロマ書5章12-21節はその一例である。アダムの罪は、我々の罪の自覚の有無にかかわらず、祖先から受け継がれ、自ずと備わったものであるが、救いには、信仰という条件が必要となる。それは何故か、ということである。

救いのためには、主の十字架上のあがないだけが必要にして十分な条件となる。信仰はあくまで個人の魂の問題であり、他人が介在する余地はない。にもかかわらず、

われエホバ汝の神は妬む神なれば、我をにくむ者にむかいては、父の罪を子に報いて三、四代に及ぼし、我を愛しわが戒めを守る者には恵みを施して千代に至るなり。(出エジプト記20・5, 6)

とは、何を意味するのだろうか。骨肉は神の国を継ぐ条件にはならないはずであるのに、

「主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救はれん」(使徒行伝 16・21)

とあるのはなぜか。

イエスは、幼児をこよなく愛された。幼児を抱き上げ、「天国はかくのごときものの国なり」と言われた。幼児のようにならないければ、天国に生まれることはできない、そして、この小さい者を一人でもつまずかせるものは大きなひき臼を懸けられ、海の深みに沈められる方がまだましである、とまで言われた。

へばりついて居よ

称名はすべての思考を一時中止して、主の御名を称える。それだけである。

念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じて、智者の振舞をせずして、ただ一向に念仏すべし(法然上人・一枚起請文より)

親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり(歎異抄より)

予の基督教のすべてはロマ書 10 の 13 により「わが主イエスよ」と称えるにつきる 導源(小西芳之助)

主イエスよ。小西先生は「分からなくてもよいが、へばりついていよ」と言われました。ほぼ 50 年、不十分ながらその通りにして参りました。そして、この文章を書く機会が与えられましたことを衷心より感謝申し上げます。(1999・12・16)

小西先生の歌について

小西先生は、時おり和歌を作り、披露された。次にあげる一首は先生の代表作とってよいものであろう。

主イエスと呼ぶをはげまん今日もまた

手にくるわざもみ名を呼びつつ

この句は先生が晩年になって詠まれたものであり、以下のような原形を修正して作られたものであった。

主イエスよと呼びてはげまん今日もまた

手に来るわざを御国めあてに

この 2 首を比較してみると、先生の称名の姿勢が微妙に変わられたことに気づくのである。つまり、はげむ対象が、以前は「手にくるわざ」であったのが、晩年には「称名」になったこと。いま一つは……もう一度「み名を呼ぶ」という称名の言葉が挿入されたことである。

事実先生は日常生活を称名で占められたご様子であった。私は、先生が「わが主イエスよ・わが主イエスよ」と称えながら歩くお姿を見たことがあったし、電車の中でも、先生が吊革をもって「わが主イエスよ・わが主イエスよ」と称名されたことは、お嬢様のスワコ様が言っておられた有名な話である。

称名は救いの条件

「戦争で城に立てこもったユダヤ人が飢え死にしそうになったとき、ついに子供を煮て食べたという。人間というものは、いよいよとなったら、何をするかわからないよ」と言われた先生のお言葉。

「熱心な浄土門信者であったある婦人が、病床に伏し、病重くなられたとき、近親の人が念仏の話を始めたところ、その夫人が、『うるさい、そんな話はやめよ』と言われたそうだ。」これも先生のお話である。

このようなお話を聞くと、自分のもっている信仰が、根底から覆えされるような気がする。あまりにも浅ましい人間、自分で信仰を自覚できなくなってしまった人間。そのような人間が果たして救われるのだろうか。

先生は初めのうち、「称名は信仰を持続するために必要」と言っておられたが、後には「救いの条件」と言われるようになった。そして、よく言われたことは、「信仰とは、誰でも、どんな人でも、何時でも、どこを、どう押せば救いに到達できるか、明確なものではない、それが称名である」と。

「よろこび」について

〔小西〕先生は、「喜び」の人であった。先生のお顔は常に喜びに輝いておられた。一高の時代に福音に接し、回心を経験されたとき、先生は「あめに宝積めるものは、げにも幸なるかな……」と讚美歌を歌いながら寮の中を踊り回られたという、有名な逸話が残されている。それ以来、先生はよく喜びよく踊られたという。牧師になられた当初、その教会で喜び踊られ、その教会の長老から「先生の信仰は、私どもの信仰とは違います」と言われたということも伝説的逸話としてお聞きしたことがある。

あるとき、私は自分には、本当の喜びがあるのかどうか疑問に思い、どうしたら本当の喜びの人となれるのか、と悩んだことがあった。それを先生に質問した時、先生は歎異抄の一節を引いて説いてくださった。

念仏まうしさふらへども、踊躍歎喜の心、をろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまいりたき心のさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房同じころにてありけり。よくよく案じてみれば、天におどり、地におど

るほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきところををさへて、よろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。また浄土へいそぎまいりてたきころのなくて、いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。……

いそぎまいりたきころのなきものを、ことにあはれみたまふなり、これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ。踊躍歎喜のころもあり、いそぎ浄土へまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらいなましと、云々。

先生は、最後に「唯円坊は親鸞からこのように教えられた後で、さぞよろこんだことじゃろうな」と言われた。そのお言葉は今なお私の心の奥底に残っている。

先生のよろこびはこの喜びであり、キリスト者の喜びはこのよろこびなのだと思った。そして、私もよろこんだのである。

「潔き供物」の意味

されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧
む、己が身を神のよろこびたまふ潔き活ける供物として献げ
よ。これ霊の祭りなり。(ロマ書 12・1)

このパウロの言葉の「己を潔き活ける供え物」として神に献げる
とは、具体的に自分は何をどうしたらよいのか。……

小西先生のお答えは明快であった。「今、自分の前に与えられた
なすべきことを全力をあげてなせ。サラリーマンは会社の仕事を、
主婦は家庭の仕事を、運転手は運転を、門番は門の仕事を自分の力
の範囲でせよ。十の力をもつものは十の力で、五の力をもつものは
五の力を出してなせ。これが我々のできる、潔き活ける供物であ
る」と説かれたのである。……

これなら私にもできないことはない。今、自分の目の前に与えら
れたなすべきことをこそ、神によって与えられた潔き仕事であり、
我々が全力投球すべき仕事であろう。先生は、力ある人が成し遂げ
た、社会が称賛するような大事業は「大したことはないよー」と言
われ、むしろ平凡な人間が誠実に実行する平凡な仕事の方を、高く
評価された。

会社員の生活が信仰を鍛えた

私は一時、自分の仕事に疑問を持ち、なかなかこれに打ち込むことができなかった。その解決のため、先生のご意見を何度か伺ったことがあった。先生もかつては会社員をしておられたので、時にはそのころのご経験を語られたこともあった。そのようなお話の中で、私が感銘を受けたお言葉は、「会社員としての生活が自分の信仰を鍛えた」という一言であった。私も、先生にあやかって、自分の信仰を鍛えたいと思った。

各人その召されし時の状に止るべし。なんぢ奴隷にて召されたるか、之を思ひ煩ふな（もし釋さるることを得ばゆるされよ）召されて主にある奴隷は、主につける自主の人なり。斯くのごとく自主にして召されたる者は、キリストの奴隷なり。汝らは價をもて買はれたる者なり。人の奴隷となるな。兄弟よ、おのおの召されし時の状にとどまりて神と偕に居るべし。（コリント前書7・20-23）

しかし、平凡なものが平凡な仕事を全力投球するということは、決してやさしいことではなかった。これは先生のお言葉を実行しようとしたものが等しく経験したことであろうと思われるが、私の経

験では、そのことすら完全には実行できない自分を発見することになった。そして、自分の罪人としての自覚がますます深まっていく結果となったのである。

しかし、そのことは先に述べたマタイ伝9章のイエスのお言葉を有難く思い起こすきっかけにもなった。パウロの勧めはめぐりめぐって、「私の救いは『称名』しかない」と思わせるようになった。

その意味で、小西先生は私にとって、善智識、否、それ以上の方なのだ。それは、私だけでなく、先生に称名を教えられ、主の御名を称えつつある人は、皆そのように思っておられることであろう。

先生との出会い (1)

昭和 26 年 4 月、私は大手建設会社の大林組に入社、大阪の本店設計部に勤務することになった。そして、ここで、山田貞次郎氏と榎根英郎氏との出会いがあったのである。

山田氏は、私より 4 年ほど先輩の東京大学建築学科卒の立派な建築家であった。同じ設計部勤務であり、同じ独身寮に住むことになった関係もあり、いつしか親しくお付き合いさせていただくようになった。…山田氏は、ご自身、人付き合いは苦手であり、人の好き嫌いが激しいのが欠点である、と言われたが、それはまるで私のことを言われたように感じた。さらに、氏は仏教の知識を豊富に持たれ、とくに、熱心な浄土真宗の信心をおもちであることが分かった。

榎根氏は、私が配属された設計部の直属の課長であった。また、榎根氏は、山田氏の宗教上の師でもあり、山田氏にとっては善知識にあたる方であった。氏も熱心な浄土真宗の信者であり、またその仏教知識は僧侶並みであるとうわさされていた。榎根氏は、奈良県郡山のご出身であるが、旧郡山中学校に数学の教師で島村清吉先生という方がおられた。このかたが氏の宗教上の師であった。島村先

生はもとより熱心な浄土真宗の信者であったが、仏教を数学的に研究された由であり、仏教の知識においても僧侶以上のものがあつたと側聞している。島村先生は心ある人々に乞われて、日曜、休日などに、仏教の話を講演されたが、樫根氏はこの講演会で先輩である若き日の小西芳之助先生と席を同じくされたのである。記録によると、小西先生が島村先生のお話を聞かれたのは、主として、高等学校、大学にご在学中の冬休み、夏休みであった。

山田氏とは職場で同氏が主催された仏典の研究会や、特に独身寮の部屋で、浄土門仏教のお話を伺う機会が多かった。また、樫根氏からは職場で仕事の合間に、時折伺ったものである。忘れがたい思い出としては、私が東京支店勤務になった後で数年後東京支店設計部長として赴任されたあとで、小西先生のご提唱で浄土三部経のお話を数名の方とともに聞きしたことである。両氏のお話を通して、私は仏教の根底にある「三世因果の原理」と「大無量寿経にある第十八願」について、私なりに理解できたと思っている。

このように、私は浄土門仏教徒となる絶好の環境にあつたのに、なぜそうならなかったのであろうか。今でもそれを不思議に思うのである。

先生との出会い (2)

山田氏からお話を聞いていた時、たまたま内村鑑三先生の話が出た。当時私は内村先生のごことはよく知らなかったもので、山田氏の尊敬する内村先生に非常に引き付けられてしまった。私は、間もなく、内村鑑三著作集を購入して読み出し、先生に強く引き付けられていったのであった。このことが、私がキリスト者となる第2のチャンスとなったのである。

それは、昭和26年の暮れ近いころ、樫根氏から「内村門下で、私の先輩で牧師をしている人が東京にいるが、正月休みに帰省した時に会ってこないか」と言われた。その人こそ小西芳之助先生であったのである。…

昭和27年正月、帰省した時、高円寺東教会をお訪ねしようと、勇躍、当時の国鉄高円寺駅に降り立ったのであった。

ところが、住所もわからず、高円寺駅と中野駅の間で中央線の南側である、という樫根氏の言葉をたよりに捜し回ったのであるが、どうしても見つけることができなかった。2時間余も経過してしまったので、今日はあきらめて帰ろうと、高円寺の駅に戻っていた。駅の近くに来た時、私の目に、向かいにある薬局の看板に書

かれた十字架が飛び込んできた。そこで聞けばわかると思い、とっさにその薬局に入って、高円寺東教会の所在を聞いたところ、ご主人らしき人が明快に「はい、わかります。小西芳之助先生の教会です」と答えてくれ、地図まで書いてくれたのである。私には、薬局のご主人が天使のように見えた。

地図を頼りに道をもどって行ったところ、やっと、先生のお宅に行きついた。恐る恐る玄関を開けて、お呼びした私のお出で下さった先生は、にこにこしたお顔の和服姿であった。牧師というよりも、私の第1印象は禅僧であった。まるで、昔からの知己のように私を座敷に招き入れてくださった。

小西先生との初めての会話

昭和 27 年の正月、当時、私の勤めていた会社の上司であった檜根英郎氏の紹介で、初めて小西先生をお訪ねしました。私は、その時、幾つかの心の問題を抱えていましたので、初対面のごあいさつが終わって、すぐ、先生に質問を切り出しました。

私「信仰によって義とされる、という事はよく分かりますが、信仰には個人差があります。深い信仰の人は深く救われ、浅い信仰の人は浅くしか救われないのでしょうか」

先生「信仰には浅い深いはない。信仰があるか、無いかだけだ。し
いて言うなら、十字架の贖いで救われるという信仰は、深い信仰で
あり、そうでない信仰は浅い信仰だ」

私「現在、私は仕事のことで悩んでいます。物を扱う仕事ではなく、心に関係のある仕事がしたいのです。私は今、建築現場に寝泊りして仕事をしていますが、困りの人は、仕事が終わるとパチンコばかりしています。こんな環境から早く抜け出して、教師のような仕事がしたいのですが、どうでしょうか」

先生「パチンコぐらいやれよ！皆と一緒にやってやりたまえ！お前の言っていることは己ひとり清しとしているように聞こえるじゃないか。いまの仕事を続けたまえ！

会社員も教師も、関東の餅は四角く、関西の餅は丸いぐらいの違いしかない。神は君を会社員にした、だから今それを全力を挙げてやれ。私は自分の長い会社員生活の体験から、確信をもって、このことをお前に言うことができる。こう言える事だけでも、私が会社員をやっておった甲斐があった。もし、今の仕事が、本当に不適當なら、神はいつか、必ず別の仕事を君に与え給う。それまでは、今の仕事をしっかりやれ！」

私は、この言葉に不満を感じながらも、先生の言われた通りにしました。そして本当に良かったと思っています。

その後の人生

私は先生のご意見に従うことを決意し、用意してあった教師の口を断り、正月休みが終わるころ、大阪に帰っていった。やがて、先生のおすすめに従って、大阪、寝屋川市の香里教会で洗礼を受けることになる。この年5月ころ、東京支店に転勤になり、正式に高円寺東教会の一員となって、小西先生の教えを受けるようになったのである。

その後、私は3度職場を変えたが、一貫して建築の設計に携わって来た。この仕事は、私にとって必ずしも最適な仕事とは思えず、始めはこの仕事から離れたいと思ったほどである。しかし、小西先生の言われたとうり、不十分ながら一生懸命やってきたつもりである。だが、年を重ねるにしたがって、薄紙をはぐようにそのような気持ちがなくなっていき、後にはむしろ、やりがいを感じることがなくなったことは事実である。職場を変えるときは、その都度、先生にご相談申し上げ、ご同意、ご賛成を得た。

そのようなことを顧みた時、私ごとき者の上にも、主の恵み深き導きのあったことを思わざるを得ない。